昭和三十年に於ける国語学界の展望

一、国語学一般（音韻・文字・語彙・意味）

鈴木真喜男

はじめに

三月もなかばちかくなって、昨年度にひきつづき、昭和三十年度の展望を、との依頼をうけ、辞するを得ず、ペンをとることとなった。

三十年度に発表された論文のかずは、前年に比して、さらに増加しているようである。かぎられた時間と紙数とであってみればすべての論文をよみ、その要旨を紹介することは、個人のちからでは、到底、不可能である。かかるしごとこそは、『国語年鑑』のどときにゆだねらるべきはずのものであろう。このような、論文の、いわば大量生産は、斯学の隆盛と解して、よろこんでのみいてよいものか、どうか、実は、この点についても、問題があるかにおもわれる。

わたくしは、ちからをつくしてもとめ得た諸論文、すなわち、音韻関係三十四篇、文字関係二十三篇、語彙関係二十六篇、意味関係二十三篇と、九冊の単行本について、重点的に展望をこころみることとする。すでに、このかぎりにおいても、以下の記述はわたくしの主観をまぬかれがたい運命にあるわけであるが、さらに、個々の論文に言及するにあたって、なんらかのかたちで、わたくし個人の価値判断をともなうことも、むしろ、わたくしとしては、やむを得ないこととおもう。現に、昨年、築島裕氏は、「国語史・国語学史」の展望を担当されたが（本誌二一輯）、たまたま氏のとりあげられた論文に、わたくしも、「国語学一般（音韻・文字・語彙・意味）」の展望で本誌二二輯、おなじくふれざるを得ないものが何篇かあった。その結果は、築島氏とわたくしとではおなじ論文をとりあげても、当然あつかいかたにことなるものがでてくることとなった。つまり、これは、展望執筆者の見解の相異が、必然的にあらわれたゆえであって、単なる雑誌要目や内容紹介ではすませえない本誌における展望のありかたによるものであろう。以下、読者は、この点を諒承して、およみいただきたい。ついでながら、おそれることは、未見のものもすくなからずあろうか、ということである。この点もこめて、大方の叱正を得ば、さいわいである。

一、音韻

この分野は、ことしも活潑であった。まず、『世界言語概説下巻』（研究社、五月）の「日本語」音韻の項で、服部四郎博士は従来発表された博士の学説にもとづき、主として、東京方言の音

韻体系を記述されている。このうちで、Jakobson らの"Preliminaries to Speech Analysis"を参看しつゝ諸音素の諸対立をたてこの諸対立の組合せによる音韻体系を、化学の結晶図をおもわせるような図でしめしているのは、注意をひく。かって、博士は、言語行動の発音運動の型に関する現象と脳の構造とをむすびつける方法を発見したとき、「始めて、我々は科学的説明に成功したと言い得るのではなかろうか」(「言語学における行動主義――言語学と他の諸学科との関係――」哲学雑誌六〇巻七一〇号)とされたが、これも、そのひとつのこころみであろうか。同書「琉球語」の音韻の項とあわせみるべきである。千葉勉氏「音声学に於ける新たなる研究分野」(言語研究二八号)は、ノンセンス・スピーキングの例を大脳の活動と関連づける考察をあげ、音声学は、従来、発音器官・聴覚器官に重点をおいていたが、今後は、大脳との問題を開拓すべきであり、これによって、言語の音声的側面を科学的に解明できる、としたもの。これら、大脳との関係を重視しはじめたうごきは、ちかごろ喧伝されるサイバネティクスをてらしあわせるとき、偶然のことではないとおもわれる。

服部博士「音韻論」(国語学二二輯、入門講座)は、音韻論の定義からはじめて、主として、音素を帰納するための方法をとかれたもの。いまだ、全貌はあきらかにされないが、従来の博士の学説を要約したものとみてよろしかるべく、初学者にも専門家にも便利なものであろう。そのうえ、「破擦音の作業原則」は、従来とかれなかったところであり、また、「音素の頻出度と機能的負担量」の研究の必要をとかれるなど、新味もすくなくない。おなじく、服部博士に「『音韻論から見た国語のアクセント』補説」(国語研究二号)がある。京都方言・亀山方言などのアクセントの型の弁別的特徴に関して、「国語研究二号」でのべられた説から『世界言語概説下巻』の「日本語」音韻の項にみえる新説への展開を、「高アクセント素でも低く始まることがあり得、低アクセント素でも高く始まることがあり得る」として、説明される。ついで、室町時代末期の日本語にみえる/b d g z/と/p t K S/との相関関係において、[P]の存在に関連して、/Φ/が「すきま」となっていることを例に、「すきま」の概念について、亀井孝氏との異見がのべられている。すなわち、亀井氏が、「すきま」は、ある対立が属する相関関係の体系を決定する特徴とは無関係の弁別的特徴の重加からくるアシメトリーの概念であり、このばあいの例では、/b/は、interrupted/Φ/は Continuant である、としたのに対し、博士は、相関関係を成立せしめる弁別的特徴と無関係の特徴は、弁別的ではない、/z/ /s/ の strident に対し、/d/ /t/はmellowであったに相異なく、したがって、/b/ /Φ/もmellowである、換言すれば、/Φ/は、はっきりした continuant ではなかったろう、とされた。これに対し、亀井氏は、おなじ誌上に「室町時代末期の/Φ/に関するおぼえがき」を発表されて、/Φ/の位置が、なにゆえ、「すきま」になるか、に、中心をおいて、つぎのように論じられた。すなわち、/Φ/が、服部説のごとく、はっきりした anticontinuant でないとすれば、それは、もはや、/p/ではなく、/P/と解すべきであり、また、/b/の相棒が mellow であったことは、/Φ/が Continuant であったことを、なんらさまたげない、とし、これを室町時代末期における歴史的事実としてうらづけようとして、ヤソ会版ロー

マ字文献と捷解新語との標記がもちいられている。かかる実証的基盤のうえにたって、/b/の interrupted と/ɸ/の Continuant との対立が、有声無声の体系の内部における位置の「すきま」になる原因であり、かつ、可能性としてみれば、/b/の位置も「すきま」になりうべきである、とされた。さらに、「すきま」は、「あきま」とともに、共時論的概念であり、/ɸ/の位置に/P/がはいるということは、厳密には、通時論的視野において、とらえられるべき現象である。とし、かつ、表現における〔p〕と〔ɸ〕との選一は、文体の問題に属するか、服部博士の主知的な観点は、この時代において、その当時の民衆が、いかにさかんに、日常のいきた表現で〔p〕をもちいたろうか、というような点には、おもきをおいていない、と評されている。この論争は、この分野における高度の水準にあってなされたものであり、注意して味読すべきであるとおもわれる。

つぎに、音韻史関係にうつる。ここでは、まず、故有坂秀世博士の遺稿『上代音韻攷』（三省堂、七月）を特筆する。昭和十年前後、病床にあってものされた本書は、「第一部古代日本語に於ける音節結合の法則」「第二部音韻変化について」「第三部奈良朝時代に於ける国語の音韻組織について」の三部よりなる。『国語音韻史の研究』におさめられた諸論文をはじめ、かって、つぎ〳〵に発表された諸論考の原型のおおくは、ここにもとめられる。もちろん、個々の問題については、このち、他の学者によっても、すぐれた研究が発表されてはいるけれども―そのうちのあるものについては、すでに、同様の考察が、本書にみえる―、上代という一特定共時態の音韻体系の記述研究として、厳正綿密な資料のとりあつかいは、ひろい視野からの犀利にして、しかもひかえめな解釈とあいまって、行論の整然たること、他におおくその類をみないといえよう。二十年後の今日、これにつけくわえるべきことは、なお、すくなく、おとろえることのない生命を有しているのは、偉観である。金田一京助博士が、本書の刊行にちからをつくされたのは、この意味においてであり、単なる追慕追悼のためではない。

つぎに、大野晋氏に「万葉時代の音韻」（万葉集大成六）がある。氏の新見をふくんでの概説。とくに、「第四章大和地方の音韻」では音節の結合に、「第五章語法と音韻」では動詞活用形の成立に、ちからをそゝがれているが、これらは、第三章にしめされた上古音節の音価推定の論拠の公表をもまって、当然、学界の批判にゆだねらるべきものである。たとえば、第四章の母音の連続の項で、変母音を形成するもののうち、oi＞ui の例に「大石」をあげられるのは、いかがなものか。（日本書紀にみえる「於費異之」の「費」字は、ホのかなとはみとめがたい）。大野氏にはこのほか、『世界言語概説下巻』の「日本語」の歴史の項と、「万葉仮名の字音研究の手引き」（万葉集大成一一）がある。前者のうち、音韻史については、上古・中古・中世末期にわけて、その音節表をかゝげ、説明をくわえているが、音韻史、文法史ともに上古の部分は、前掲の論文と、ほゞ同趣旨である。後者は、頼惟勤氏との共同執筆で、前篇大野氏のは、中国字音についての術語や資料文献の解説。初学者のために、この種の概説書がなかっただけに便利である。後篇頼氏のは、中国音韻史研究の展開を解説したもの。かずおおくの文献がしめされていて、この方面にうと

い国語関係者を益するところがおおきい。なお、この論文発表後 Karlgren 氏の "Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese" Stockholm 1954' 董同龢氏『中国語音史』(台北、中華民国四三年―一九五四―初版、四四年再版)、姜亮夫氏『瀛涯敦煌韻輯』(上海、一九五五年)などが輸入されている。このほか、金沢庄三郎博士の「朝鮮の字音」(国語学二一輯)は、短篇ながら朝鮮漢字音の研究の必要をとかれたもの。中村璋八氏「神宮文庫本五行大義背記に引存する東宮切韻佚文について」(東洋学研究一一号)は、資料の紹介として価値がある。

特殊かなづかい関係では、以上のほか、福田良輔氏「奈良時代東国方言とその基層語」(国語国文二五五号)は、万葉集巻二十および巻一四にみられる甲乙両類の混乱は、一言語内における内的要因によって、時間的に生じた現象ではなく、東国方言の成立それ自体にある、とする論。三吉陽氏「万葉集における『ト』の混乱」(愛媛国文研究四号)は、おおく用例を検し、乙類を甲類にあやまるばあいは、清音がおおく、かつ、ほとんど「刀」字をもちいているが、この字は、日本語「ト」をうつすのには、不適当であり、音価の差よりも、むしろ、字画のすくないことによって、甲乙両類にわたり使用された、とする。「ト」は、万葉集において、甲乙の区別の混乱がいちじるしいものであり、また、万葉後期におけることであるにしても、それだけに、字画のすくないことのみをもって、甲乙両用の根拠となしうるか、どうか、疑問である。田中卓氏「邪馬台国の所在と上代特殊仮名遣」(国語国文二四九号)、大森志郎氏「上代仮名遣ひから見た邪馬台国の擬定」(東京女子大学論集五巻二号)の二論文は、「邪馬台国」の「台」字が乙類と目されるところから、その所在が、大和か、九州か、との論。わたくしとしては、邪馬台国の所在の決定よりは、田中氏が、「古典の真偽を問題とする場合、特殊仮名遣の規準を適用して、その合否の結果によって簡単に真偽の判定をしようとする傾向」に警告を発せられた点に意義をみとめる。もちろん、特殊かなづかいは、有力な武器ではあるが、その限界をかんがえるのによい例でもある。

平安時代にはいると、前年、中田祝夫氏が『古点本の国語学的研究総論篇』で、「地蔵十輪経元慶七年点に、オヲの混一例なし」とされたことに対する異見として、大坪併治氏「おぐらき考」(訓点語と訓点資料四輯)、曾田文雄氏「寛弘五年のオヲ混一資料」(国語国文二四六号)がある。前者は、地蔵十輪経に「オクラキ」の例が、いままで指摘されたほかに、いま一例ある、とし、これらは、やはり、オヲ混同の例とみるべきことをのべているが、音韻史的な解釈のうらづけは、やゝよわいようにおもわれる。後者は、この時代の訓点資料では、オヲの混一した資料は、今日まで報告されていないけれども、混乱した例は、かなりあり、今後、平安中期以前の資料が発見されれば、オヲ混一資料のでてくる可能性のあまりにつよいことをのべている。

中世にはいると、浜田敦氏に「語末の促音」(国語国文二四五号)と「国語音韻体系に於ける長音の位置―特にオ段長音の問題―」(国語学二二輯)がある。前者は、主として、全浙兵制考附録の日本風土記や捷解新語を資料に、中世末における語末の〔t〕は、これと相関する撥音/N/のささえによって、音韻体系のなかに/T/という位置をしめたが、この/T/は、教養階級では、〔t〕、

庶民階級では〔tsu〕に発音され、しかして〔tsu〕も、服部博士のいわゆる「作業原則」によって、/T/と解釈できる、との論である。しかし、この時代のかかる問題に関する資料、このばあいことに中国関係の資料的性格や（たとえば、日本風土記にみえる入声韻尾は、glottal stop のかたちで保存されていた、とする推定の根拠もほしい）、また、教養階級と庶民階級と、二元的にわけながら（というよりは、かくわけること自体に）、一元的な作業原則を適用するなど、検討の余地はおおい。後者は、まず、有坂音韻論と服部音韻論との比較検討からはじまって、音韻を発音の意図のがわから調音の観察をもふくめて規定しようとする氏自身のたちばから、現代の、いわゆる長音は、母音モーラと、まったくおなじ音韻と解釈する。また、中世末のオ段長音の開合の差は、音声的な区別であり、キリシタン資料が、vo・ôでうつしているのは、編者が、自然な連続的発音をたゞしいものとみとめたゆえであって、音韻論的には、オ段長音は、二つの母音モーラであった、とする。この論考も、あるいは、氏自身いわれるごとく「議論百出する惧れのある」ものでもあろうが、「問題になる様な音韻は、どんな方法を以てしてもやはり問題になるので、それは決して方法がわるいのではなくて、紛糾の責任は言語自体にあると言」ってよいものか、どうか。ここまでくれば、問題は、科学認識論の領域にうつってしまうとかんがえられる。浜田氏は、科学の方法に対して、オプティミズムをとられるのであろうか、ペシミズムをとられるのであろうか。とにかく、紛糾の責任を言語のがわに帰することは、わたくしとしては、うべないかたい。つぎに、奥村三雄氏「撥音ンの性格―表記と音価の問題―」（国語学二三輯）は、音価推定のための資料、方法は、なお、研究の余地があるが、黄檗宋音・臨済唐音の資料からすれば、撥音ンは、鎌倉末期から江戸初期にかけて〔ɲ〕的なものから〔ɴ〕にちかくかわったろう、との推論。大塚光信氏「バ四・マ四の音便形」（国語国文二四七号）は、前年度の浜田敦氏「音便―撥音便とウ音便との交錯―」（国語国文二三五号）、前田勇氏「近古末に於けるバ四・マ四の音便事情管見」（国語国文二四一号）につゞくもので、バ行四段・マ行四段の音便形は、口語においては、抄物・キリシタン物、ほゞひとしく、原則としては、語幹末がウ列音のときは撥音便、その他のときはウ音便である、とのてがたい論証。亀井孝氏「近代日本語の諸相の成立」（国語学二二輯）は、講演の要旨であるだけに、ふかく問題をほりさげないうらみはあるが、いろ〳〵示唆するところのものをふくんでいる。音韻の面に関しても、語の統一をたもつ契機としてのつよさのアクセントの問題や撥音・促音の発生は、閉音節の発生を意味せず、また、この二者は、音節組織の構造よりすれば、それぞれ、広義の母音と解釈し得るのではないか、とするがごとき問題の提起がみられる。

江戸時代にはいると、松村明氏に「江戸語における連母音の音訛」（お茶の水女子大学人文科学紀要七巻）と「江戸語から東京語へ」（国語と国文学一〇月号）がある。前者は、浮世風呂・浮世床を資料に、〔アイ〕→〔エー〕、〔アエ〕→〔エー〕などの同化現象を考察し、この現象は、下層社会の下品でぞんざいなことばに、とくに普遍的であり、ていねいなことばづかいやお屋敷ことばでは、〔アイ〕〔アエ〕のままたもたれていたこと、〔エー〕は、〔e:〕であたろうことなどを論じている。後者は、ヘボンの辞書

の Dialects の項にあげてある クヮ→カ、ユ→イ、ヒ→シ、ナ→ネなど六つの江戸語の音韻的特徴ともいうべきものの実例は、江戸語資料に容易にみいだせるとして、実証している。この時代の音韻の研究者がすくないだけに、氏の活躍が期待される。なお、川上蓁氏の「東京語に於けるエイとエーの別」（音声学会会報八八号）とあわせよむとき、興味ふかいものがあろう。

ここで、アクセントにめを転ずる。前記、服部博士の論文のほかに、柴田武氏に「日本語のアクセント」（国語学二一輯）と「アクセント変化の一面」（方言研究二号）とがある。前者は、従来の方言アクセントの研究は、(1)単語を単位としていた、(2)三モーラ以上の記述がない、という点で不十分であり、今後は、アクセント論的単位をもって、型の歴史的統合の究明とともに、共時的なアクセント体系の記述が必要である、として、京都・東京・穎娃など七つの方言について、諸説を批判しつゝ、その体系の構造の記述を、あざやかにこころみたもの。すぐれた労作であろう。後者は、アクセント変化のつよい要因のひとつに、年令の差のあることを、三重県阿山郡阿波村における三モーラ動詞のアクセントの型を例に、統計理論による検定法を利用してしめしたものである。

柴田氏が、前掲の論文で、今後の音韻論・音声学については、すくなくとも音響的データをのこす必要がある、とされたのは、すぐれた見解であろう。この意味でも、土居光知氏の「日本音声の実験的研究」（岩波、八月）は、注目される。この種の研究がすゝみ、一般の研究者も、容易に利用し得るようになるべきである。なお、昨年度にも、土居氏ら八氏による「オシログラフによる日本語アクセントの研究」（日本学士院紀要一二巻一号）があった。昨年度、かきもらしたので、ここに追記する。また、X線撮影による精密測定をもって、下顎運動の実態をとらえ、かつ、舌・口筋・下顎三者間の力学的関係をもとめようとした（顎隔測定器の紹介もある）兼子尚道氏の「発音に於ける下顎運動の研究」（音声学会会報八九号）や、前田勇氏の「現代大阪の子音―録音逆題による考察―」（同誌）のようなこころみもあることを、ここに記しておく。

つぎに、平山輝男氏「言語島の音調体系成立とその解釈（付）音調境界線」（国語と国文学一二月号）は、アクセントの島について、山梨県奈良田方言を例にとかれたものであるが、アクセントの記述説明にあたり、「反省的型」とか「仮設音節」とかいう氏のあたらしい術語を、あらかじめ、なんの規定することもなくもちいられているのは、理解の客観性をさまたげるおそれが、多分にあり、学術論文としてうべないがたい。また、仮設音節なるものを＝であらわし、「エ（絵）オ」を /O＝/「エ（柄）オ」を/O/などと記述するのもいかゞなものか。一柳慎悟氏「標準語アクセントについての一考察」（音声学会会報八七号）は、おおむね価値にとぼしい。

アクセント史については、金田一春彦氏「古代アクセントから近代アクセントへ」（国語学二二輯）がある。平安末期以後、京都語のアクセントには、南北朝時代と江戸後期の二回にわたり大転期があり、アクセントの性格そのものにも、語義の区別にやくだつアクセントから、一語のまとまりのみをしめすアクセントへの脱皮があったことを、史料を駆使して論じたもの。まさに、氏

の独壇場である。奥村三雄氏「東西アクセント分離の時期―外来語のアクセント―」（国語国文二五六号）は、漢語のアクセントが、日本語アクセントの史的研究にやくだつとする提言。どこまでつかい得るかは、今後の問題であろう。馬淵和夫氏「『いろはうた』のアクセント」（国語学二三輯）は、「いろはうた」のよみかたには、古来、意味を無視して、七音ごとにくぎってよむものと、意味に即してよむものとの二種あり、後者の資料はすくない、との論。秋永一枝氏「古代のアクセント註記からみた古今和歌集解釈の諸問題」（国文学研究一二輯）は、声点をつけたひとの語義解釈の態度についてのべている。

以上のほか、佐久間鼎博士『日本語のかなめ―音韻と語法の法則―』（刀江書院、十月）がある。日本語についての科学的認識は、さほどすゝんではいない、とする著者が、日本語による一般言語学をめざすべきである、として、全篇十二章のうち、前半六章を音韻にあてて、平易な文章で論述している。このほか、佐藤良雄氏「蛸蛉音韻考」（方言研究二号）、河野亮氏「音韻から見た『初心仮名遣』」（音声学会会報八八号）もある。

二、文字

この分野は、語彙、意味の分野とともに、研究の「最も遅れたものの一つ」であることは、池上禎造氏もいわれるごとくである。本誌二十輯は、六篇の論文をもって、文字論の特輯をこころみているが、このうち、半数の三篇は、漢字を国字問題のたちばにおいてとりあつかっているのは、国語学としての文字論の現状を、如実にあらわしている。

かゝる現状に対してなされた池上禎造氏の「文字論のために」（国語学二三輯）は、文字論の体系化が困難な理由を追究し、ついで、文字史記述にあたっては、文字意識（文字生活）のうらづけの必要を強調されたもの。おだやかなものいいのうちに、示唆するところのおおきいものである。つぎに、昨年にひきつゞいての、山田俊雄氏の活躍がめだつ。氏の「国語学における文字の研究について」（国語学二〇輯）は、国語学における文字論は、批判するにたるだけの体系も組織もないだけに、言語の学としての文字研究の領域を明確に認識してかかろう、とする氏が、従来の文字研究を批判しつゝ、今後へのありかたをのべたもの。「素材としての文字の可能性」と「用法における文字の価値」とを区別すべきこと、かな創製後における漢字の意味解明の必要など、注意すべき提言がおおい。ところどころ、有坂音韻論のアナロジーによって、かんがえがすゝめられているのも注意をひく。この山田氏のいだいている文字論研究の構想を、万葉集を例に、具体的プランとしてしめしたものに「万葉集文字論序説」（万葉集大成六）がある。万葉集の文字の研究は、従来、ほとんどが、いわゆる用字法の研究に終始しているが、言語研究のたちばからは、字の順序・排列・具体的な字体・書体なども検討すべきであって、かくすることによって、万葉集の解明のみならず、奈良時代の表記現象研究の一翼となりうる、とする。また、氏は、「倭漢朗詠集の詩句の用字」（成城文芸五号）で、表題にみえる字種約千七百八十字を、本朝文粋（巻一）および古事記の字種と比較して、漢詩創作にあたっては、文字の選択が重要であるから、文字は単に、音声的言語を固定するとばかりはいえず、使用字種の頻出度

用字法などを無視しての数量の比較は、無意味であることをしめしている。氏の今後への展開が期待される。

つぎに林大氏執筆の『世界言語概説下巻』「日本語」の文字の項は、概観・漢字・仮名・補助記号・正書法にわけて、現在までの成果を概説している。また、「言語生活」四十六号は、かたかなとひらがなの特輯で、池上禎造氏「明治以来の正書法」、阪倉篤義氏「平かな用法の歴史」、山田俊雄氏「過去におけるカタカナの諸相」がおさめられている。いずれも、啓蒙的ながら、新見をふくんだ論考である。

中田祝夫氏「かなの論くさ〴〵」（国語学二〇輯）は、平安時代のかたかなは、社会共通のものに対して、いまひとつ、点本特有のものがあったことを指摘し、かつ、今後は、かたかなが、字源からどし〳〵はなれていった事実を考慮して、ひらがなの論もなすべきである、とする。築島裕氏「辞書史と片仮名」（千葉県国語国文学研究会　国語研究四号）は、辞書において、十世紀後半、和訓や字音の注にかたかなをもちいるようになったのは、「片かなが、それまでのやうにメモ的な文字から、社会的に通用する正式の文字へ昇格したことを意味する」との論（「社会的に通用する正式の文字」という規定のしかたは、やゝ曖昧におもわれる）。

つぎに、森田武氏「吉利支丹資料のローマ字綴―日葡辞書・ロドリゲス大文典を中心として―」（国語学二〇輯）は、サブ・タイトルにしめされた一二書のローマ字つゞりを詳細に検討し、(1)オ段合拗長音 eu の表記は、かな表記と関係ふかく、iô との差も表記上の相異にとどまる、(2)連声・促音の表記にもかな表記との関連がみとめられる。(3)四つがな・オ段長音は、区別が困難になっていた、(4)同語の二重形をみとめ、二様に表記した、ことをのべた基礎的な力作。阪田雪子氏「天草本伊曾保物語におけるオ段拗長音のローマ字綴字法をめぐって」（東京女子大学　日本文学五号）は表題について、原則的には当時の標準的発音にもとづいたもので混同はなかった、とし、オ段合拗長音に対する二様のかきかた eô iô のうち、iô のあらわれる例を例外的なものとして、一つ〳〵検討している。森田氏と阪田氏とでは解釈に相異がみられる、このオ段合拗長音の表記をめぐる問題は、今後、なお、かんがえられてよいものであろう。

以上のほか、つぎにあげるものは、おおむね、いわゆる用字法の研究であり、それも、文字論というよりは、むしろ、用字法の考察を手段としてのみもちいた論文がおおい。さらに、これらはいずれも上代関係である点、ここにも、文字論の現状があらわれている。

門前真一氏「上代における御の一用法―御立座而と御阿加良畝坐の訓―」（山辺道創刊号）は、「御」字について、中国語の原義と日本における用法を比較して、その間の一致と背反の程度を検討し動詞につく「御」字は、本来、中国的なものであり、日本的造語であっても、接頭語「み」をあらわしたものではない。とし、万葉集でも、動詞のしたに「給」などをつける用法と併用されると「御」は、「す」「ます」などと訓読されるゆえ、サブ・タイトルにかゝげた例も「ミ……」とよむことに疑問を提した基礎的な労作である。福田良輔氏「倭建の命は天皇か―古事記の用字法に即して―」（語文研究三号）は、「御」「坐」「幸」「崩」「詔」など

の字は、最高の神、天皇、大后、后など特定の身分に応じてもちいられているゆえ、倭建命にこれらの字をつかうのは、当時、命の天皇即位説が支配的であったことをしめす、との論。西田長男博士「古事記の仏教的文体続篇」（芸林六巻一号）は、古事記における「白」字は、かならず下位のものが上位のものに発言するばあいにかぎられており、梵語の文章法に由来するものである、として、梵文金剛経などをあげて対比している。また、古賀精一氏「古事記における会話引用―曰、奏、詔、告の用字法―」（古事記年報二）も、会話の引用にもちいられた文字のうち、「白」「告」は、漢訳仏典系統、「奏」「詔」は、史書系統に由来する、との論考、このほか、『古事記年報二』（古事記学会、一月）には、小野田光雄氏「古事記の助字『尓』について」藤井信男氏「古事記の成立時期と用字法との関係―『師』の字について―」、梅沢伊勢三氏「古事記及び日本書紀の字音仮名の性格」、鴻巣隼雄氏「人麿をめぐる字音仮名と記紀歌謡との対比」がある。小野田氏のは、表題について、これが「於是」と相互関連の意識において使用され文脈進展に参与する承上の詞としての用法が原則、との論。藤井氏のは、「師」字を訓かな「シ」にもちい、音かなにもちいない―音かなら割注で注記するはず、とする―のは、「道師」などという語が八色の姓にあらわれているように、「師」というものが国家社会の組織のなかに定位され、そのまゝ、いきた語になったゆえである、との推論。梅沢氏のは、書紀のかなが、記のそれに比して複雑であり、かつ特異な字彙をもっているのは、大陸伝来の典籍と緊密な関係があり、また、時代的には、旧紀のかなをそのまゝのこしている、との論であるが、古事記伝・日本書紀通証によって、紀記の字音かなを比較するなど、あつかいが粗雑であり、価値にとぼしい。鴻巣氏のは、人麿作歌と人麿歌集とのあいだには、用字にかなりの差異があり、また、両者に通ずる字は、記紀歌謡にとっても、あまり特異なものではないとする。なお、松本雅明氏「古事記の奈良朝後期成立について」（史学雑誌64編八・九号）は、古事記が書紀よりさきに成立したとすれば、次第に統一する傾向にある万葉かなの種類が、書紀によって一旦複雑化し、さらに統一されることになる点に疑問を提し、古事記の成立を七六〇年代とする論であるが、単に万葉かなの種類の多少によって、文献成立の時期を云々するのは、危険であろう。

津之地直一氏「借訓か実辞か―『垣廬鳴』の『鳴』をめぐって―」（国文学四号）は、「鳴」を実辞とみて「カキホナシ」とよみ、「垣をとよもして」の意をする論。鶴久氏「『天霧之』の訓について」（語文研究二号）は、従来、「アマギラシ」とよんだ表題の一句を、「之」は、漢文の助字の用法であるゆえ「アマギラヒ」とよむべしとの論。また、神田秀夫氏「万葉集の用字の一側面」（万葉集大成一一）は、万葉集中の白話風の用字についてのべたものである。

三、語彙

この分野では、まず、概観をこころみたものに、林大氏の『世界言語概説下巻』「日本語」の語彙の項がある。語形・漢語及び外来語、同義語、命令の傾向にわけて概説している。また、語彙調査の方法については、水谷静夫氏の「語彙調査最近の歩み」（文学一二月号）に紹介がある。

つぎに、佐竹昭広氏「古代日本語に於ける色名の性格」（国語国文二五〇号）は、この分野における本年度の白眉である。上代日本語にあって、色名と目されるものの大半、すなわち、ヌバ・ミドリ・ムラサキ・ハネズ・クレナヰ・ハナダ・ニ・ソホの諸語は、原始染色文化を背景とした顔料色による陰喩であり、これ以外のアカ・アヲ・シロ・クロ・キの五語は、明・漠・顕・暗のひかりの感覚によるものである、との論。ひろい視野にたってのきめのこまかい論究であり、かっての「音と光」（国語国文二二八号）につづく労作である。このほか、上代関係では、阪倉篤義氏に「万葉集における語詞構成」（万葉集大成六）と「万葉語彙の一面」（国語国文二四九号）がある。前者は、万葉語における複合語の構成様式は、多様自由であり、また、単音節の語は、それが、本来、もっている意味の抽象性によって積極的に語構成に参加していた、とし、万葉集の語彙は、たがいに価値的な連絡をたもちあっていた、とする。そして、抒情詩の世界たる万葉集は、価値的に独立し、明確な概念をもった漢語の流入を極度に警戒した、とするなど、興味ある見解をしめしている。後者は、事態の概念をあらわす接頭語マ・カ・タ・サをもつ語が、万葉集以外の文献には、ほとんどないことから、万葉集にしめされているものは、当時のうたの用語であり、この事実を無視して、簡単に上代語と中古語との語の構成様式の変遷を比較してはならない、と注意を喚起している。武田祐吉博士「副詞『もとな』について」（国語研究三号）は、この語は、「もと（根元）」に感動をあらわす「な」のついたものであって、間投詞ふうの性格をもつ、との論。また、博士には、「あまのひつぎ考―大伴の家持の用語の一として―」（万葉一四号）などもある。小島憲之氏「日本書紀の文章―神代紀を中心として―」（国語国文二四九号）は、神代紀の文章は、当時の中国の俗語のおおくをもってかゝれていることを例証したものである。

平安時代関係になると、近年、さかんとなった訓点語の研究によって、いわばめずらしい単語の紹介がおおい。春日政治博士が「古訓雑記」（訓点語と訓点資料四輯）、「聖語蔵本菩薩善戒経点」（国語国文二五五号）、「万葉集と古訓点」（万葉集大成二〇）で、モノカズナリ（屑）・アタム（貳）・サヒ小刀（鉄製）・スル（奪）などの単語をしめされたのをはじめとして、築島裕氏に「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点」（訓点語と訓点資料四輯）の本文訓み下し文と漢字語彙索引があり、平井秀文氏に「陽明文庫本遊仙窟・訓読語彙」（福岡学芸大学紀要五号）がある。また大坪併治氏「石山寺本妙法蓮華経玄賛巻第三の訓点」（訓点語と訓点資料五輯）にも、語彙をあげている。ちなみに、これらの論文には、それぞれのかな字体や、ア行ヤ行のエの区別などの音韻関係の資料を紹介しているものもおおく、大坪併治氏「国宝南海寄帰内法伝の訓点」（島根大学論集五号）では、星点によってアクセントをしめした例十六例をあげ、この資料と同時代の類聚名義抄のそれと比較して、一致するものがすくないことをうたがっている。

総じて、これらの資料には、ひもときがたいものがおおいからその意味で、厳密正確な釈文の提供が、もっとものぞましく、かつ、益するところもおおいであろう。したがって、「訓点語と訓点資料」は、その基礎的な資料研究において、おおきなやくわり

をはたしていることをよろこびたい。しかし、その反面、珍奇な語の発掘などは、かえって、訓点資料を一般の研究者のちかづきがたいものと感ぜしめるおそれもある点、いさゝか、こころもとない気がする。

なお、小林芳規氏「訓点資料に見える『ズキ』の用法」（未定稿創刊号）は、無量義経に「ズキ」なる用例があり、形容詞的性格をもった「ず」が、助動詞「き」に接した例として報告されている。築島裕氏「古今集仮名序と漢文訓読」（東京大学教養学部人文科学科紀要七輯）は、かな文学にもちいられない訓読の語彙・語法が、古今集かな序のなかに、相当みいだせることをのべたもの。秋本吉郎氏「平安朝前期の特徴的歌語について―『かずかずに』『いへばえに』考―」（大阪経大論集一四号）は、「かずかずに」は、「数々丹」を訓読して生じたもの、「いへばえに」は、「言不得」と「言」字を転倒させたばあいの新訓法をもちいた新造語二語とも平安初期の特徴的歌語である、との論。山田俊雄氏「色葉字類抄畳字門の訓読の語の性質―古辞書研究の意義にふれて―」（成城文芸三号）は、表題の語が、類聚名義抄所収の語とあいおおう性質を濃厚にもっていることを指摘し、色葉字類抄は、組織・体例のうえでは、画期的なものではあるが、その内容は、日常の実用というよりは、漢文訓読の教養に資するものであった、とする。

つぎに、井手至・塚原鉄雄・浜田敦三氏の共同研究による「国語副詞の史的研究」の㈡（人文研究六巻五号）と㈢（大阪市立大学国語学研究調査冊子第三冊）がある。㈢の方では、井手氏執筆の「せめて」は、この語が、古代後期に情態副詞として成立してから、現代語のように叙述限定の副詞にいたる過程をあとづけ浜田氏の「あながち・に」は、源氏物語のころより盛行した「あながちに」が、「に」をうしなったかたちで固定する江戸中期までに、意味の方も、情態性から程度性をへて陳述副詞化したことを類義語と比較しつつ論じている。㈡は、塚原氏の「『なかなか』の展開」と題するもの鎌倉時代から現代にいたる変遷は、この語が、「あちこち・に」とおなじく情態性が程度性にうつり、さらに陳述の副詞になったことを論じている。このほか、寿岳章子氏「形容詞の語彙的変遷―中古から中世へ―」（国語学二二輯）は、語彙史記述のせぶみをこころみようとしたもの。また、目加田さくを氏に、天理図書館蔵の天文末書写とみられる「奇異雑談集の語彙について」（文芸と思想一〇号）の紹介考証がある。

森岡健二氏「訳語の変遷―語構成を中心として―」（東京女子大学比較文化研究所紀要一巻）は、造語論のたちばから明治以降の英和辞書を資料として、訳語の方法の変遷からはじめて、語構成の変遷を六項目にわけて論じた労作。広田栄太郎氏「世紀という訳語の定着―近代訳語考3―」（国語と国文学一〇月号）は、"Century"がどのように訳されて世紀」におちついたかを、江戸末期以来の辞書について調査し、明治十五年ごろからとする。

かくみてくると、この分野の研究も、散発的であり、それだけに、今後にまつところがおおいとおもわれる。以上のほか、『綜合日本民俗語彙』（平凡社、第一巻六月・第二巻九月・第三巻十二月）が「へ」の部まで刊行されたことは、貴重であり、無事完結することがのぞまれる。また、時枝誠記博士編『徒然草総索引』（至文堂、八月）などの索引の刊行も、語彙の研究を促進する意

味においても有意義であろう。新村出博士『広辞苑』（岩波書店五月）もみのがすことはできない。

なお、村山七郎氏「亀井孝『ツル』と『イト』を読みて」（国語学二二輯）は、前年発表された亀井氏の論考（国語学一六輯）への批判で、奈良朝以前において、「タヅ」と「ツル」、「カハヅ」と「カヘル」などにみられる母音間のdがrに転化したことが、もっとおおくの例によって実証されなければ、亀井説は承認しがたい、とするものであるが、問題の焦点がずれているようにおもわれる。つまり、亀井説は、「ツル」という語を、比較語彙から削除する、しないの論ではなく、語としては、「ツル」そのものがアルタイ起源であるとしても、この語にふくまれるrは、日本語の内部でおこった変化である可能性があるから、しかく簡単に比較できない、という注意を喚起したものとおもわれる。ついでながら、本年度における書評には、みるべきものはすくないが、河野六郎氏の書評「亀井孝『Chinese Borrowings in Prehistoric Japanese』」（一橋論叢一二月号）は、風格のたかい文章である。

四、意味

この分野に属する論文は、ことしも、おおくはなかった。

ここでも、上代関係からみていく。小島憲之氏「万葉語『ハタ』の周辺」（万葉一六号）は、上代語の意味をさぐるために、もとの漢籍に対する訓読のあてかたなど、源泉をたどる必要がある、とし、「ハタ」とよまれる「為当」は、とくに唐代における変化のなかに、おおくの例がみいだされ、AかBかを撰択することばであって、日本語の意味も、この源義に関連のふかいものであるとの論。三辺清一郎氏「越の俗語あゆの風考」（万葉一四号）は万葉集にみえる「あゆの風」を、高岡市における気象関係の資料統計によって、北東風である、とし、それが日のでる方向からふくことによって、東風とかんがえられていたことを論じている。境田四郎氏「万葉の『ヤド』と『ヤドリ』」（女子大文学七号）は「ヤド」は、家の意の「ヤ」に、「所」という意味を附与する接尾辞「ド」のついたもので、家そのものをさすのが本義であり、「ヤドリ」は、「屋取ル」で宿舎をもとめる意であって、この時代には混用されていた、とする。春日政治博士「『取与呂布』私考」（西南大学文学論集一巻一号）は、「よろひ」を武士の具足ということから類推して、「タリソナハル」の意とする従来の説は疑問であり、ものにちかづく「ヨル（寄）」に継続の「ふ」のついたものとみ、「山か皇都によろふ」の意とする代案を提出されたもの。おなじ問題にふれたものに亀井孝氏の「埋もれた言語と埋もれた訓詁」（万葉一七号）がある。氏は、「群山ありと」という旧訓を復活させようとするところから、「よろふ」の意味にもふれていって、「よろふ」は、動詞「よる（縒）」の派生形であり、この名詞形が「よろひ（鎧）」で、動詞「よろふ」は、鎧との連合から「身を固める」意の一語となったもの。したがって、うたの意味は、「群山を周囲にめぐらして、身を固めている天の香山」と解されるという説をだされている。佐伯梅友博士「万葉語研究―『新室のこどき』『生ひざりし草』―」（万葉研究八号）は「こどき」は、「蚕時」に「ことほぎ」の意をかけた枕詞、「生ひざりし」の「生ふ」は、「はゆ」が、もっぱら芽のでる点を中心とするのに対し、成長することまでをふくめた意味、とする論

考である。大坪併治氏「うつらうつら考」（万葉一七号）は、「ウツラ」は、「ウツ（顕）」に接尾辞「ラ」のついた副詞で、「目ニウツラ」とは、「目ニハッキリト」の意味である、とする。阪倉篤義氏「『宇多我多毛』割記」（万葉一七号）は、遠藤嘉基、大野晋両氏の説に対し、この語は、そこにのべられている事実に対する主体の感想や批判を表明する性格をもつ、との論。武田祐吉博士「いまのをつづ考」（万葉一七号）は、この語の「ヲ」はおそらくは、「ヲ（緒）」であり、それに「続く」の「ツヅ」が接続して、いまの継続性を表示し、未来に対してつながりをもつ意、とする。藤森朋夫氏「万葉集『はだれ』考」（万葉研究号）は、「薄雪」説を支持したもの。山本俊英氏「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」（国語学二三輯）は、上代において、ク活用に属する語は、状態的な属性概念をあらわし、シク活用に属するものは、情意的な面をあらわすのが、大部分であるとする。

つぎに、風間力三氏「『ゐる』の意味史」（甲南大学文学会論集二）は、「ゐる」の意味を文脈によって、坐意、存在意などに分類して資料を調査し、ふるく「ゐる」は、存在意よりも坐意をになうのが本領であり、時代がくだるとともに存在意がつよくなった、とする力作。方法論としては、なお問題もあろう。島田勇雄氏「『ごとし』の意味について」（研究七号）は、「ごと」「ごとし」「ごとくなり」にわけて、成立の事情、年代をかんがえるとともに、意味を、その語のあらわしうる概念内容をおおきく分類するときの個々のわく、としてとらえようとし、「ごとは」等同・類似、これに状態・例示・卑下・不たしかな断定のくわわったのが「ごとくなり」、「ごとし」は、さらに方向がくわわったものとしているが、かゝる意味分類の方法やしかたは、検討の余地がおおいであろう。原田芳起氏「おはさふ・おはさうずの意味構造」（語文一六輯）は、この二語の差をアスペクト的な区分による、とするもののようであるが、論旨不明確である。土坂武治氏「堤中納言物語語彙考証」（立命館文学一一六号）は、「きんだち」は、貴族の子女にももちいられたなどの論であるが、論証によわい点もある。

つぎに、石川徹氏「平安文学語意考証（其一）―をこがまし・さるは・ものかは―」（平安文学研究一七輯）は、サブ・タイトルにあげた三語につき、それぞれ「不恰好・不体裁をみつともない、はずかしいとする気持」、「同一のことがらを観点をかえていう語」「その結果として、ろくなことにならぬ意」である、とする。三宅清氏「さきざきの意義」（国語国文一四八号）は、和泉式部物語の「よもさきざき見給ふらむ人のやうにはあらじ」の「さきざき」を「将来」の意とする遠藤嘉基博士の説に異見をたて、「過去」の意である、とする。これに対して、遠藤博士は、同誌上の「新講和泉式部物語（八）」で、語の意味は、文のなかにおいてこそいきるゆえ、それとの関係を考慮すべきである、と反論している。このようなところからも、意味論は、いかにあるべきか、の論が、もっと活潑になされてしかるべし、と痛感する。以上にあげた論文も、二三のものをのぞいては、訓詁・解釈の作業に付随してなされたものが大部分であるのは、いささかさびしい。もっとも、だからといって、石川徹氏の発言のように（前掲論文）、平安時代の言語の意味内容の研究を国語学にのぞむのは、

「百年清河」をまつひとしい、とは、さらく〳〵おもわないし、かつ、氏のいう「意味内容の研究」とは、いったい、どんなことをさすのか、不明でもある。いずれにせよ、言語における意味とはなにか、また、いかに記述すべきかは、もっと真剣に考究されてよい時機であろう。

近世にはいると、小野晋氏「『利休』という語について」（近世文芸二号）は、満散利久佐にみえる「利休」という語は、「痴鈍」の意であり、同書のなかに頻出する「利発」の反対語であって、茶人千利休とは無関係に、明暦・万治・寛文初期、遊里語として新町にのみつかわれた、とする。池上秋彦氏「江戸語研究断片」（桐朋女子学園紀要四集）は、江戸小咄を資料に、「欠落」という語は、元来、ある集団から脱落して、ひそかに逃亡することを意味した、との論。なお、この論文には、「女房」の「女」のごときォ段拗長音を単にイ段長音にして発音したどときふりがながあるが、実際には、かく発音したとはかんがえられない、との論もあわせしるされている。

このほか、心理学の方からなされたものに、梅本堯夫氏「形容詞の類似性・熟知性尺度―連想法及び評定尺度法による―」（京都大学教育学部研究紀要1）、賀集寛氏「言語学習転移と意味的反応汎化」（人文論究六巻一号）があって、注意をひかれる。また、大久間喜一郎氏「相反意義成立の基盤」（文学研究一二号）などもある。

付記

以上のほか、潟岡孝昭氏「鎌倉初期のンとム」（徳島大学紀要四巻）、藤村幸三氏「『文字観念』に関する試論―特にその存否並びに性格面について―」（滋賀大学国語国文学一号）は、興味ある論題であるが残念なから、いずれも未見である。また、『国語学辞典』における関係項目についても、ふれるべきであるが、その余裕がないので割愛する。たゞ、啓蒙を目的の一とする本書にあっても。